

1. 指定物件の表示及び所有者

指定区分	有形文化財
種 別	考古資料
指定名称 及び員数	木製組合せ式案 1件 (雀居遺跡第4次調査出土)
所 在 地	福岡市博多区井相田二丁目1-9-4 (福岡市埋蔵文化財センター)
所 有 者	福岡市

2. 雀居遺跡について

雀居遺跡は福岡市博多区雀居地内に所在する。福岡空港の西側に広がる遺跡で、平成3(1991)年の1次調査以来、空港関連施設の整備に伴って現在までに十数カ所の発掘調査が行われ、縄文時代晩期から中世にかけての幅広い時代の遺構、遺物が検出されている。特に平成4・5(1992・1993)年の4・5次調査や、国際線ターミナル建設に伴う10～13次調査では、弥生時代を中心とする数多くの発見があり注目を集めた。ここでは低湿地という遺跡の立地上、有機質遺物の遺存が良好で、農具や容器などの生活道具から、建築部材、祭祀に関わると見られる道具など、多種多様な木製品や漆器が出土したことで知られる遺跡でもある。

遺跡の西側数キロ圏内には、最古の農耕集落として国の史跡に指定された板付遺跡や、中国の歴史書である、いわゆる『魏志倭人伝』に書かれた奴国と目される比恵・那珂遺跡など、多くの著名な弥生遺跡が広がる地域でもある。

3. 資料の概要

本資料は、4次調査のSD-03と呼ばれる溝の上層から、部材の一部を欠きながらも組み合わされたままの一式が、土圧により潰れた状態で検出された。その後、福岡市埋蔵文化財センターでの保存処理を経て復元された。出土した層位の遺物は弥生時代後期後半のものである。

いずれの部材も目の詰まった厚さ1cm前後の柂目板材で作られ、天板と脚4枚、脚を上下から挟む細長い矩形の押え板4枚、脚の上部に穿たれた半円形の孔に差し込んで、天

板と押え板を固定する鼻栓4点で構成される。この内、出土した時点では脚1枚と鼻栓2点が失われており、保存処理の後、現状では脚を別の個体で補って展示資料としている。天板は縦33.7cm、横60.3cmの長方形である。脚は長さ(高さ)22.4～23.8cm、最大幅9cmで頭部は半円形に加工され、天板や押え板と組み合わさる部分は段が設けられている。また脚の中程には半円形の割り込みが作られている。天板には数mm間隔の細かい刃物傷が長軸方向に直交して無数に入り、この上で何かを引き切る作業が頻繁に行われたことを想起させる。用いられている樹種は奈良国立文化財研究所(当時)の光谷拓実氏による同定でスギとされ、同時に行われた天板部材の年輪年代測定では87A.D.との結果が得られている(光谷1995)。

この種の資料は、戦後間もない昭和26(1951)年の大分県安国寺遺跡で、脚と押え板が組み合わさったものが出土したが、器種の同定には至らず長らく不明木製品とされていた。その間、福岡県春日市辻田遺跡や、福岡市内でも西区の拾六町ツイジ遺跡や博多区的那珂久平遺跡で脚や押え板が単独で出土し、いずれも不明木製品として扱われており、雀居遺跡4次調査での発見によって初めてその全貌が明らかになった経緯がある。

平安時代の『延喜式』には、「机」、「案」の記載が200カ所以上あり、「案」の方が多く用いられるとされる。この「案」はツクエと訓じられており、板案(イタツクエ)や切案(キリツクエ)といった名称も見られる(下村2001)。資料の名称はこれらを援用し「組合せ式案」としている。

類例は、部材が同じ雀居遺跡の4次調査や隣接する5次調査、やや北側の12次調査などで複数個体見つかっているほか、最近では西区の今宿五郎江遺跡(12次調査)でも複数個体分が出土している。現在までに福岡をはじめとして佐賀、長崎、大分といった北部九州の弥生遺跡約20箇所で見られるが、これらは脚の木取りや寸法などに若干の差異はあるものの、意匠や組合せ方には高い共通性が認められる。

用途については、事例は少ないながらも天板の類例に、ほぼ例外なく密な切り傷が刻まれることから見ると、物置用の机を場当たりの作業台に転用したとは考えにくく、当初から何かの切断作業をするためのものと考えるのが妥当であろう。そして、組合せ式である点からは、常時使用するものではなく、強度的にも強い力を加える作業には不向きといった状況も窺えるが、具体的な用途については諸説あるものの特定には至っていない。

4. 指定理由

以前の考古学では有機質遺物の出土事例が少なく、研究対象は土器や石器といった無機物が中心であったが、近年、低地の開発に伴う発掘と保存処理技術の向上、設備の普及によって、有機質遺物は研究上確実に重要な位置を占めつつある。この型式の案が出土する遺跡は、その多くが地域の拠点集落と目されるもので、用途や使用状況は明確ではないものの、北部九州において共通の文化が営まれたことを示す資料といえる。本資料の属する弥生時代から古墳時代への移行期という流動的な社会状況の中においては、文化圏を考える上で非常に重要な資料である。

部材で見れば類例は多いものの、主要な部材がほぼ揃った事例は本例が唯一であり、そ

の全体像を明らかにし得た資料として学史的にも意義深い。また製作技法の観点からは、その後の指物技術に繋がる部分もあり、資料の意義は考古学の分野に止まるものではない。

参考・引用文献

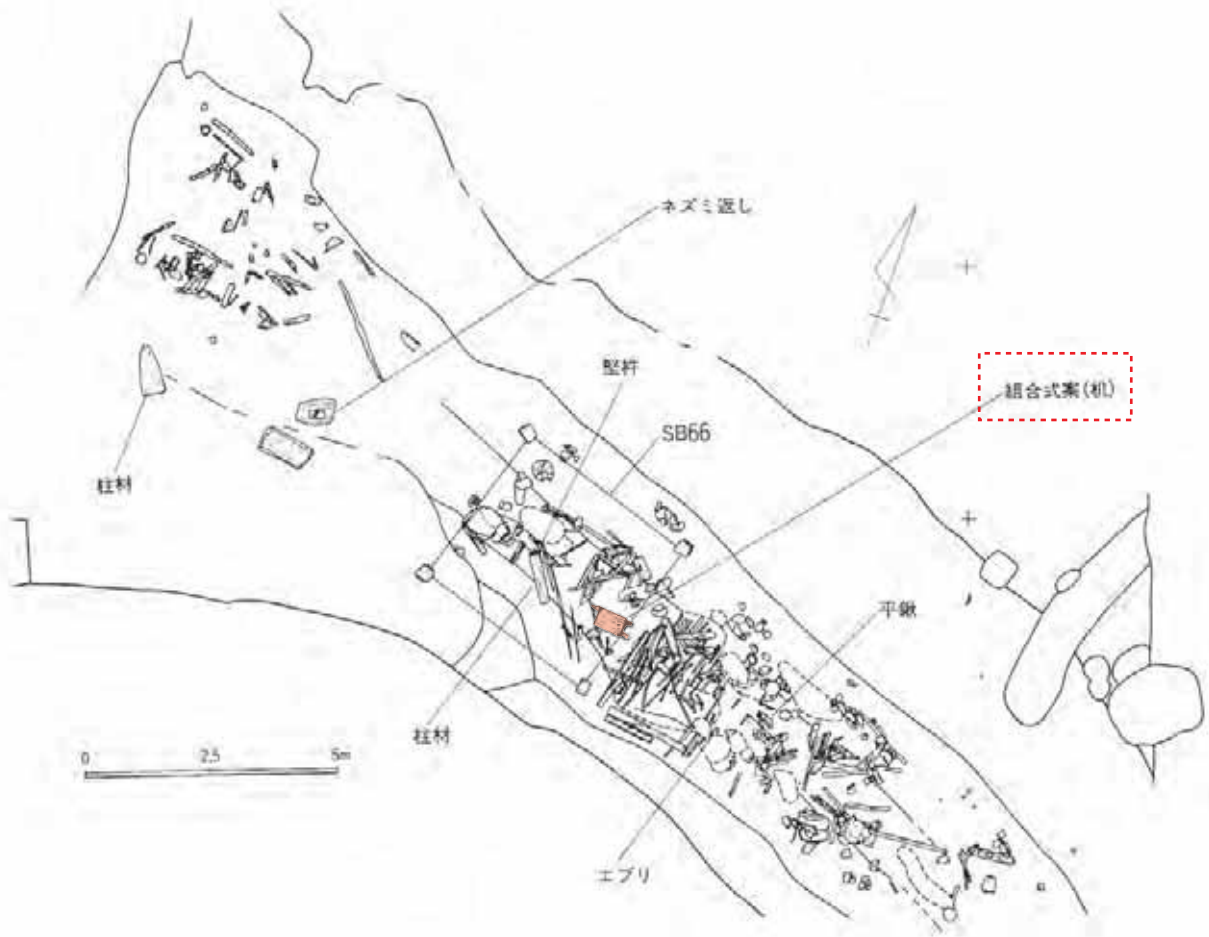
下村智 2001「安国寺遺跡出土の「井の字形組合せ木器」と木製机」『別府大学アジア歴史文化研究所報』
第18号 別府大学

福岡市教育委員会 1995『雀居遺跡2』福岡市埋蔵文化財調査報告書第406集

光谷拓実 1995「年輪年代法による雀居遺跡出土木製品の年代推定」『雀居遺跡2』福岡市埋蔵文化財調査報告書第406集 福岡市教育委員会



雀居遺跡 4次調査 調査区全体図



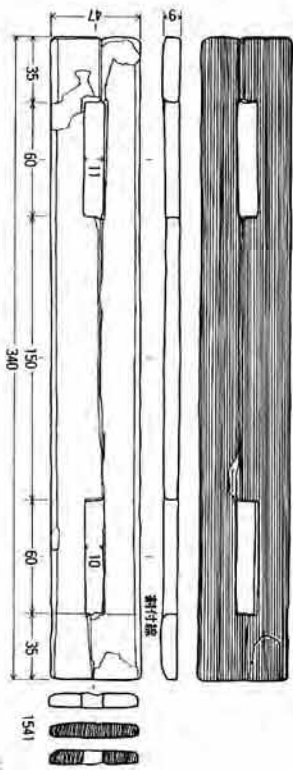
組合式案出土状況図



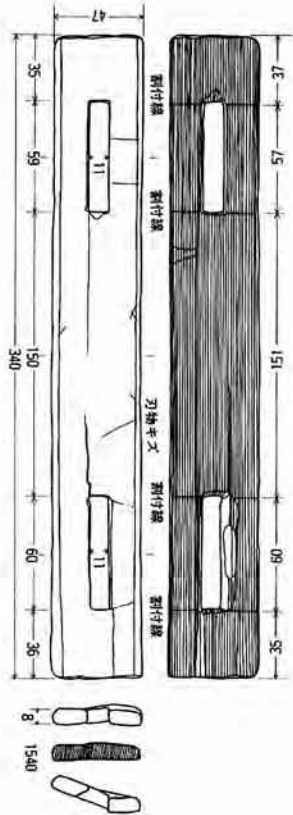
雀居遺跡 4 次調査 調査区写真



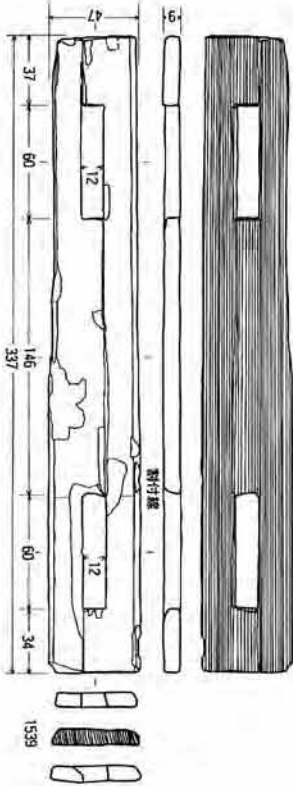
組合式案出土状況



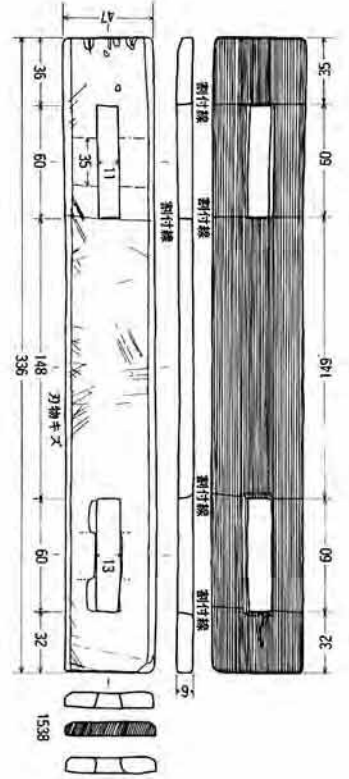
押え板1
遺物登録番号：924160004



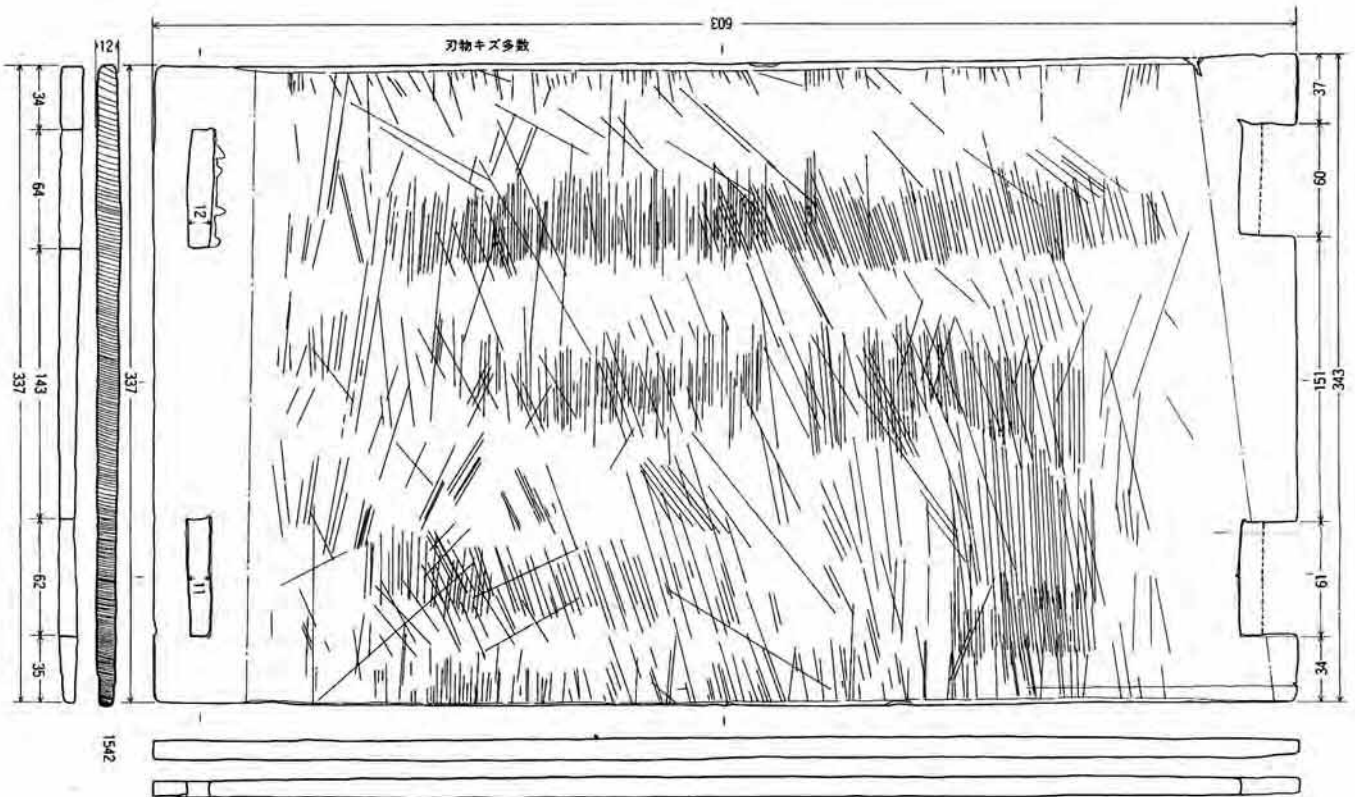
押え板2
遺物登録番号：924160003



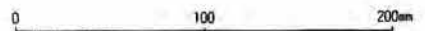
押え板3
遺物登録番号：924160002



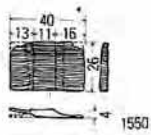
押え板4
遺物登録番号：924160001



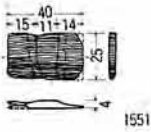
天板
遺物登録番号：924160005



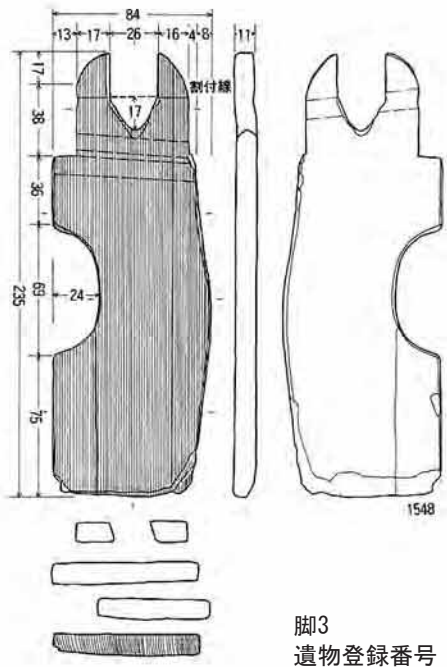
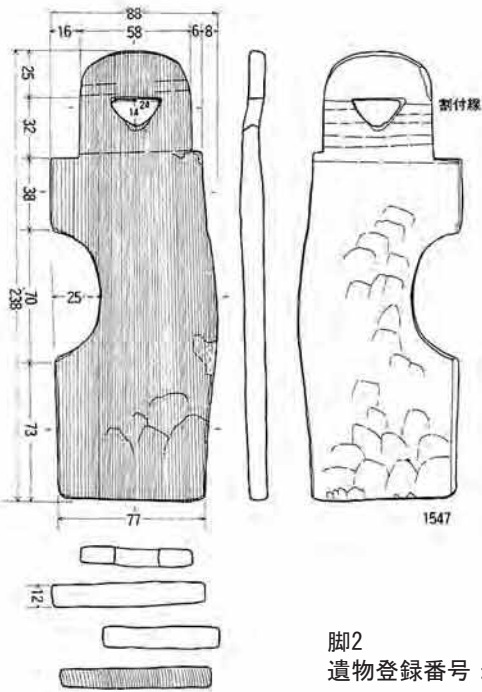
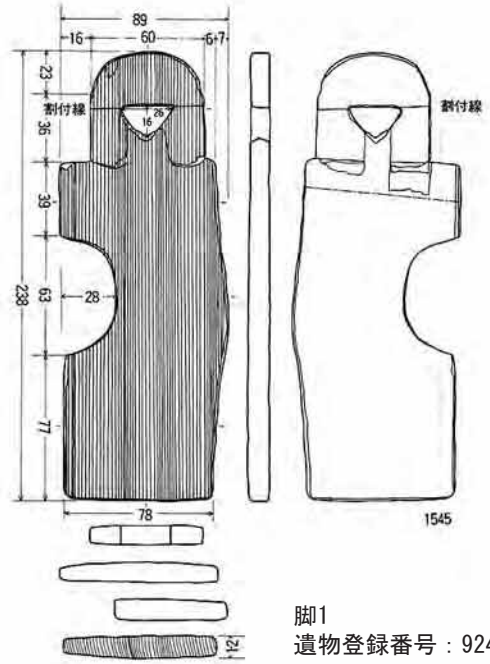
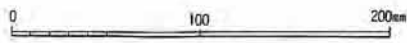
雀居遺跡4次調査出土組合せ式案の部材 S=1/4

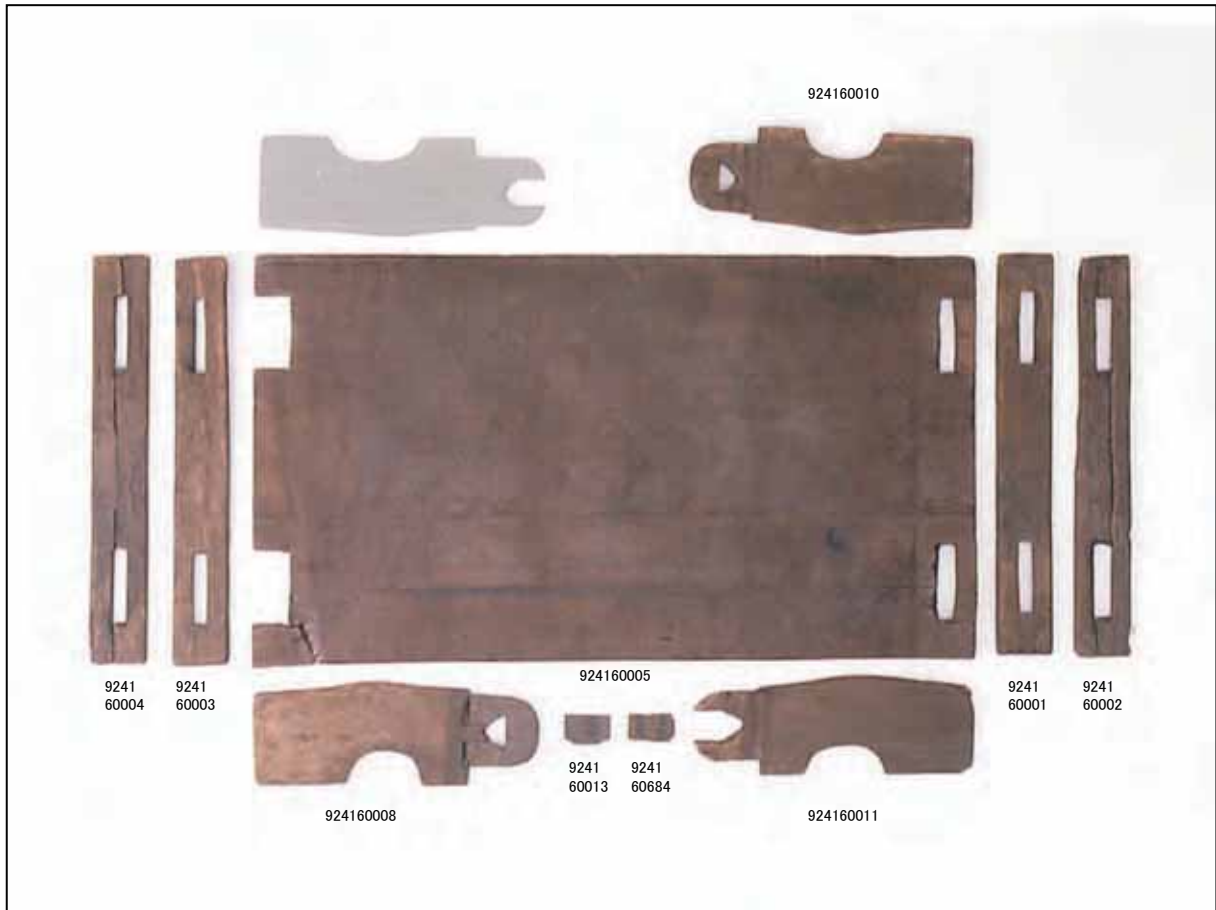


鼻柱1
遺物登録番号：924160013



鼻柱2
遺物登録番号：924160684





組合式案 部材展開写真



組合式案復元状況